平田ロータリークラブ週報

発行日　毎週木曜日

平成19年２月22日

No.1599

率先しよう

国際ロータリー会長　ウイリアム・ビル・ボイド

第2690地区ガバナー　新　宮　彦　助

〈事務局〉
島根県出雲市平田町2280-1
平田商工会議所２Ｆ　ＴＥＬ 0853-63-3232
ＦＡＸ 0853-63-5365
ＩＰ　050-5204-5816
A.M. 9:00 ～P.M.5:00　土・日曜・祝祭日休局
E-mail　hiratarc@hit-5.net

会　長　加藤喜久　　副会長　田中久雄
幹　事　荒木　貫　　会　計　金田卓也

例会プログラム

例　　会	卓　　話　　者	演　　題
第１５９９回	医学博士　羽根田紀幸様	モンゴル医療ボランティア
第１６００回	会員　木佐彰三	書画の楽しみ
第１６０１回	松江地方気象台　調査官　梅原　伸様	温暖化と島根の気象

出　席　報　告

会　員　数	出　席　者　数	欠　席　者　数	出　席　率	前回補正率
４８	４０	８（２）	８６．９６	８４．７８

欠　席　者　　玉木・平野・石橋・園山・内田・持田（石倉・石原恵）

Ｍ　　Ｕ　　2/15森山・平野・常松・田中浩・加藤喜（家庭集会）

幹　事　報　告

１．休　会

○出雲中央ＲＣ　3/26(月)　定款により
○松江東ＲＣ　3/29(木)　〃
} ビジター受付　なし

２．3/2(金)　事務局休局

３．Ｉ.Ｍ（3/4(日)　ラピタ）参加について

○集合場所　平田商工会議所駐車場（バスで出かけます）

○集合時間　12：00

委　員　会　報　告

〈プログラム〉　3月例会プログラム表配布

ス　マ　イ　ル

大谷・木佐・佐々木　羽根田先生ようこそいらっしゃいました。卓話を楽しみにしております。

石原輝　20年前の「ロータリーの友」に大島卓爾会員の短歌が目にとまって。（家庭集会の原点とか？）

大島卓　先週はお休みしました。常松ＳＡＡありがとうございました。

３月８日例会受付当番	三　代　晴　美　・　杉　原　邦　彦　・　高　砂　明　弘

★松江南クラブ（月）　★出雲クラブ（火）　★平田RAC（第1・3水）
★出雲中央クラブ（月）3/26(休)　★松江クラブ（水）　★松江東クラブ（木）2/22・3/29(休)
★松江しんじ湖（火）　★大社クラブ（水）　★出雲南クラブ（金）

会長挨拶

今日（2月22日）は『竹島の日』です。これは竹島が島根県に編入されたのが2月22日でしたので、それを記念して一昨年（平成17年）3月に島根県議会が「竹島の日」制定に関する条例を可決、そして制定されたことは皆さんご存知のとおりです。

竹島の領有を一途に主張する韓国では、独島（ｄｏｋｕｔｏ）といっていますが、日本の固有の領土であることは、さまざまな資料からもいうまでもありません。10日ほど前にも市内湖陵町の民家で、島根県が所管していたことを実証する大正時代の地図が2枚も見つかったそうです。

私が小学校の4～5年生の頃（昭和26～27年）だったと記憶していますが、当時駅通りの東本町にありました水産会社に、死んだアシカが一頭いたことを、当時見たこともない珍しい生き物でしたので、今でも鮮明に覚えています。これは平田の漁船が竹島周辺で漁をしたときに捕獲したものに間違いありません。

1905年、明治政府は竹島を島根県に編入、国際法的にも正式な日本の領土となっています。しかし敗戦後、ＧＨＱは竹島を沖縄や小笠原諸島と同様に日本の行政権から外しました。これを口実に1952年（昭和27年）、当時の李承晩韓国大統領は海洋主権の宣言ライン、いわゆる「李承晩ライン」を設け、それ以来今日まで実効支配を続け、竹島周辺の海域から日本漁船を排除し、水産資源を一方的に得ています。これが日韓の竹島問題であることはご承知のとおりです。

しかしＧＨＱの竹島に対する発令は行政権の停止であり、決して領土権を日本から取り上げたものではありません。実際、小笠原は'68年、沖縄は'72年に日本国に返還されています。

一日も早く竹島がわが国固有の領土として主権を回復させるには、日本政府のもっと毅然とした態度はもちろんのことですが、それには私たち国民一人ひとりが竹島問題を正しく理解し、国民的世論を盛り上げていくことが必要であり、そのためには、まず地元である島根県民のいっそうの理解と盛り上がりが問われているのではないでしょうか。

スピーチ

モンゴル医療ボランティア
「モンゴルハートセービングプロジェクト」

どれみクリニック　羽根田　紀　幸　様

今から7年ほど前、島根医科大学小児科に在職していた際に、モンゴル国立母子保健センターから留学にきていた医師から「モンゴルでは先天性心疾患に対する治療成績が不良なので支援してほしい」と頼まれたことがこのプロジェクトのきっかけです。そこで、自分が小児循環器部門の研究班長をつとめている公益法人島根難病研究所に事務局を置き、3名の医療団を結成して2001年10月に第1回目の渡航をおこないました。渡航費・医療器材費は日本での募金活動に依りました。

渡航先のモンゴル国立母子保健センターでは、心エコー検査による診断とともに種々の先天性心疾患に対してカテーテルを用いた治療をおこないました。以来、2006年8月まで計7回渡航し、心エコーで検査した患者総数はおよそ560名を数えます。また、カテーテル治療をおこなった患者は116名で、全員、治療後元気になっており、今後も継続する予定です。

本プロジェクトのゴールは、モンゴルの小児循環器医療の自立と考えています。経済成長率は年10%以上の急成長ではありますが、国際的には最貧国のレベルを脱していない同国にカテーテル治療を根付かせることや心臓外科手術のレベルを向上させることは短急には困難であり、小児循環器全体のレベルアップのための教育的プログラムは不可欠です。そのために、カテーテル治療と併行して、講義・症例検討会や地方都市検診も行っています。今後はこれらをさらに充実させていく予定です。

なお、2006年3月に本プロジェクトを代表してモンゴル国より同国最高勲章である「北極星勲章」を受章しました。日本の民間人で同勲章を受章したのは10名未満とのことであり、モンゴル国が公式にこのプロジェクトを歓迎してくれていることの証しであると考えています。